



ザ・ブルー、初の単独来日公演が決定。ついに武道館公演も！

04年、ロック・オデッセイ2004、出演のために初来日時にピートが「来年にも単独公演で日本に来るよ」と発言してから早4年少し遅れてしまったが、やっと念願の単独来日公演が実現する。公演は、11月13〜17日に大阪、横浜、さいたま、東京で行なわれるが、特に最終日は、また伝説のロックバンドが日本武道館で見られる、ということですので話題沸騰。来

日メンバーは前回と同じ、ピート・タウンゼンド(g)、ロジャー・ダルトリー(vo)のほか、ピノ・パラディーノ(b)、ザック・スターキー(ds)、ジョン・ラビット・バンドリック(kbd)、サイモン・タウンゼンド(g)。ここ最近のツアーと、もちろん同じメンバーだ。日本語対応も始まっているオフィシャルHP (<http://www.thewho.com/>)もチェックした方が良さそう。

ミック・ジャガーらが「童話」を演じるカルトTVシリーズ

82〜87年に米国で放映された「フェアリーテイル・シアター」は、古今東西の名作童話を、ティム・バートン、フランシス・フォード・コッポラをはじめとするそうそうたる監督たちが手がけ、ミック・ジャガー、フランク・ザッパを含むカルトな俳優たちが演じた、かなりストレンジなTVシリーズ。80年代にビデオ化されていたこともあるこのシリーズだが、今回は、放映全26タイトルの中から、ミック・ジャガーの「ナイチンゲール」やフランク・ザッパ出演作を含む4タイトルを厳選、8

月2日(土)から、東京・渋谷ユーロスペース(03・3461・0211)にてレイトシヨ公開。さらに、吉祥寺バウスシアター(0422・3555)でも別の8タイトルを夏休みレイトシヨ。

評価の高かったトム・ウェイツ 評伝本のパワーアップ、新刊

歌に酔うように「もう一杯!」と止まることなく534ページをたぐり終える07年出版の評伝。前作の89年刊『トム・ウェイツ 酔いどれ天使の唄』を元に、同著者が章立て、筋運び、コメント選び、写真も新たにし、18年分の活動が付加され、約3倍のヴォリュームになった。翻訳者も新たになった。やはり僕らがまばゆい輝きとしてとらえた戦後アメリカ、その郊外家庭がかかえていた憂鬱を描いた生い立ちと、ジャック・ケルアックの『路上』への憧れ、という

トムの歌の背骨にひそむ逸話が興味深い。僕らがロックの後側に知りたい原風景だからだ。

ビートニクから、サイケをやり過ぎたディラン・フォロワーの一人として73年にデビューへと突入



『トム・ウェイツ 素面の、酔いどれ天使』パトリック・ハンフリーズ著／金原端人訳／東邦出版／¥2730(税込)

する流れで、他のシンガー・ソングライターへの距離を裏付ける描写も鮮やか。同期デビューのブルース・スプリングステインを何度も引きあいに出しながら語られる、やはり僕らにとつて憧れだった70年代音楽業界の裏面が、なんともリアルな手応えだ。

リック・リー・ジョーンズとの交際、フランシス・コッポラの映画『ワン・フロム・ザ・ハート』制作秘話から結婚、音楽スタイルの転換、グラミー賞受賞やジム・ジャームツシュとの交流など、現在まで、決して妥協のないスタイルッシュな姿が浮かび上がり、熱燗のようにジワっと身体に入ってくる。(サエキけんぞう)

小尾隆さんが誘うアメリカン・ロック・アナログLPの世界

お馴染み小尾隆さんが、豊富なコレクションの中から選んだ、60